
たいせつなもの

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たいせつなもの

【Nコード】

N21240

【作者名】

嶺羅

【あらすじ】

「振られちゃった」この言葉に私は行動せずには居られなかった
2度目の失恋をした園子に蘭は・・・？そして、あの人と園子の
行方は・・・?!

「振られちゃった・・・」

その言葉は、私の怒りを最大に大きくした。

「園子・・・私が敵とるから」

それは、夏の暑さが残る秋のことだった。

今日の園子はなんだかおかしい。やけに腹が立ってる様子だった。

「はあ・・・最近京極さんのこと、わかんなくなってきた」

「どうしたの、園子」

私はその日、園子に連れられて近くのカフェへ来ていた。

電話での口調とか、メールでの態度がいつもと違ったから何かおかしいなーとは思ってたけど・・・やっぱり、京極さんの事で悩んでみたい。

「最近私に冷たいの。ねえ蘭、どうしてだと思っ？私なにかしたか

な

「ん〜・・・メールをしなかったとか？」

「毎日してたわよ」

「それが逆にウザ過ぎたとか」

「それはないわ。5通まで送って返信が来なかったら待つことにしてるもの」

「きつとそれよ。何も返信がこないからって5通も送ってることないじゃない」

「やっぱりそうなのかなあー・・・」

そう言っつて、園子はため息をついた。

園子

「ねえ、蘭。蘭は新一君が自分に冷たくなったらどうする？」

「えっ・・・そうだなあ・・・。とりあえず謝るかな。何が原因かわからなくても、とりあえず謝っとく」

「そっか・・・じゃあ私も謝ろうかな！」

「うん、そうしなよー！」

私がそう言つと園子は「うん」と言つて携帯を開いた。ただと園子は、携帯の待ち受け画面をしばらく見つめたあと、携帯を閉じた。

「やめた！」

「謝らないの？」

「私が何したかわからないのに謝るなんて、なんか悔しいじゃない。もういいわ。京極さんなんて知らないから」

「ちよつと園子……」

「いいの、きつと京極さん、私に興味無いのよ」

「そんなこと……」

「いいわ、蘭。私、男といーっぱい遊んで後悔させてやるんだから」
「！」

「園子……」

”きつと何かの間違いだよ”

”興味無いわけじゃない”

そう言いたかつたけど、証明するものも何も、何もなかった。ただ私は、ただのすれ違いだつて事をただただ祈っていた。

その日から園子は、私の知らない男の人と遊ぶようになった。
私は危ないからやめた方がいいって言ったけど、園子は聞く耳をもつてくれなかった。

それには私も呆れて、園子の好きなようにすればいいと思うようになった。

だけど心の中では心配で・・・騙されたりしないかなって、ずっと思ってた。

あの日から一週間がたった。

携帯が鳴り、画面を見ると園子からだった。

「蘭・・・私・・・京極さんに振られちゃった！」

「・・・園子・・・」

「さっき電話で言われたんだ・・・理由は言えないんだって！私が多分、京極さんが考えた私の気持ちと同じこと考えてるだろうから・・・ってさ。もう訳わかんないよね・・・」

「園子・・・大丈夫？」

「大丈夫大丈夫！京極さんも、その程度の男だったってことよ！よし、フリーになったことだし、男とめいっぱい遊ぶぞー！」

園子は笑ってそう言ったけど、きつと辛いはず。

だって顔が歪んでるもの。

・・・園子

我慢してない？本当は、辛いんじゃないの？

私そんな園子、見てらんないよ。

園子に新しい彼氏ができた。

告白されたらしい。

私はとりあえずおめでとうと言った。

園子はきつと、京極さんの事、まだ想ってる。だってあんなに京極さんにゾッコンだったんだもの……。こんなに早く、立ち直れるわけない。

なんてこと、園子じゃない私が言うのもあれだけだね。

「でね、彼が今度」

最近の園子は明るい。

今までの事が全て無かったかのように明るくて楽しそうで嬉しそうだった。

その様子に私もほっとしたけど、時々気づいてた。

授業中、園子が窓の外を見つめてる目は、とても悲しそうで、今にも泣き出しそうなこと。

隣のクラスに京極さんと同じ名字の子がいて、その子の名前を呼ぶクラスメートがいると、つい反応してしまっていること。

園子・・・本当はまだ、京極さんが好きなんだね。ただど忘れたいのかな。京極さんの事。こついう時、私は園子になんて言えばいいんだろう。

園子に彼氏ができて、3週間が経とうとしていた。いつも園子は明るい顔を見せてくれるけど、相変わらず時々悲しい顔をする。

ねえ園子・・・私は本当の事を言ってほしい。

まだ、諦められないんじゃない？

まだ、好きなんじゃない？

これって、私の思い込みかな。

「・・・蘭」

「ん？」

その日の放課後、久しぶりに園子がカフェへ誘ってくれた。最近園子はよく彼氏と遊ぶからと言って、早めに帰っていた。カフェへ行つて椅子に座ると、園子は話をきりだした。

「・・・別れちゃった」

「・・・え？」

「あつちの男が・・・私の事好きじゃないみたいだった」

どうして？

あんなに園子とラブラブだったのに……。園子が何かしたの？違うでしょう……？

だって園子は

”次は絶対幸せになる。相手が傷つかないように今まで以上に頑張るし、彼にいい思いしてもらえるようにする”

京極さんを見返すために……

そう話してたんだよ。

「何があったの、園子。私に話して？」

「私……彼にはなんでもしてあげたいと思った。色んなところ遊びに連れてってあげたり、記念とかのプレゼントをあげたり……。本当に、彼の喜ぶような事ばかりしてたんだ。相手も喜んでたから、それでいいんだと思ってた」

「……うん」

「だけどね、彼がお金のかかることばかりに絡んできて……。もしかしてお金が目当てなんじゃないかって思っちゃったの。彼を信じてない証拠だよ……。でも、それで正解だった。考えてみれば、彼が近づいて来た時もお金が絡んでたの」

園子……

やっぱり……

「私こないだ、彼が家に來てるときつい言っちゃったんだ。『お金目当てなら出てって』って。……所詮金目当てで、私目当てじゃなかったってことよね。……だから私、別れちゃった」

その時、私の中の何かが、音をたてて切れたのがわかった。園子は私の様子に気づかないまま、一言言った。

「好きだったのにな……」

どうして園子が悲しまなきやいけないの？

「……園子。私、園子の敵とるから」

園子が言った一言で、私は何かがキレたように一直線にある場所へ向かった。

その相手は、園子が騙された男の所。

その男は学校の近くにあるお店でコーヒーを飲んでると、いつも園子に聞かされてたから、きつとそこにいるだろうと思いき行くと、案の定男は椅子に座ってコーヒーを飲んでいた。

私はそののんきにコーヒーを飲んでいる男のそばまで行こうと店に入ろうとした。

その時、私は見てはいけないものを見てしまったんだ。

その男に腕をからめながら楽しそうに話す、女。それにでれでれの園子を騙したその男の姿を。

私は頭に来て、店に入るなりいきなりその男の所に行き一発蹴りをぶちまけてやった。

「女を騙す男なんて最低！！ましてや金目当てなんて・・・この世のクズよ！！今すぐ消えなさい！！」

私がこんな事ゆうなんて・・・園子の為以外なんて絶対にあり得ないわね。

その男と女は放心状態。勿論店にいる人全員がこちらを見ていた。私は周りが見えなくなっていたことに気づき、あわてて店を出た。すっきりしたようなしないような、そんな状態で駐車場を出ると、そこには園子が立っていた。

「蘭・・・ありがとう」

「いいのいいの！私もあの男にいらつときてたしね！お陰ですっきりしたわ」

「・・・づつ・・・」

「園子・・・」

園子は泣きだした。
私が蹴りを食らわしたからか。好きな人に裏切られたからか。
・・・多分、どっちも。
どっちもだよな、園子。
辛かったね。

それから、なんとなく日は経って、園子が彼と別れてから1週間が経った日のことだった。

私と園子は放課後の教室にいた。

「私、京極さんに連絡してみる」

「うん、そうしな」

園子は連絡しようとして携帯を開いた。

しばらくして、園子の様子がおかしい事に気付いた。

「どうかしたの？園子」

「・・・京極さんからメールが来てる」

「えっ、なんて?!」

「……………話がしたいって」

「園子、行って来な！」

園子は私が背中をせかすように押すと、涙を拭いながら「うん！」
と言って

教室を出て行った。

園子の後ろ姿をじっとみると、こっちまで泣けてくる。

園子、がんばれ。

応援してるよ。

今度こそ幸せつかんでね。

私はしばらく、振り向く事のない園子の背中にそっ、心の中で叫んでいた

あれから、月日が経った。

季節は冬。

クリスマスが近づく頃だった。

「今日京極さんに迎えに来てもらっただあ！」

「そっなの？最近多いわね」

「ええ！私の為に時間を空けてくれるの」

「うらやましいなあ」

園子はその日、京極さんに呼ばれて行った。

京極さんは園子の家の前にいて、

”急に呼び出してごめん。どうしても話したくて”と言ったらしい。京極さんが園子に冷たかったのは、ただの誤解だった。

文化祭で一緒の担当になった男の子と偶然会って一緒に帰る園子を、京極さんが目撃してしまったらしい。最初は何でもないと思っていた京極さんだったが、園子はその時期は丁度忙しくて、京極さんにメールを返せずにはいた。

それが京極さんにとっては凄く不安で、

不安が募りに募ってあんな態度をとるようになったらしかった。メールがたくさん来るのも、なんだか苦しかったらしい。

時期が悪くて気持ちが悪く違ってただけで、本当は何もなかった。だからあの日、園子と京極さんはちゃんと話しあったみたいで、今は前よりもラブラブみたいで、私もほっとしている。

これをきっかけに園子と京極さんは、前よりも言葉を交わすようになった。

言葉って大切なんだね、園子

恋人同士は何も不安がない訳じゃないんだね。

「らーんー!!」

窓の外から私に向かって叫ぶ園子。

「ありがとね！」

そういつて手を振りながら帰っていく園子を見ながら、私は2人を見送った。

”ありがと”

なんのありがとだかは、言われなくてもわかった。それがわかってるから園子は何も言わなかったのかも。

園子、幸せにね。

大切なもの、失わなくてよかったね。

(後書き)

ぐだぐだですみません！汗

かなり思うがままに書いたんで

多分文章ぐちゃぐちゃだし何を伝えたいかわからないと思います
(笑)

私もわかりません！えw

ここまで読んでくださった方！

Thank you!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124o/>

たいせつなもの

2010年10月9日19時55分発行